

## 第83回 記者懇談会実施概要

1 日時 2012年5月30日(水) 15:00~17:00

2 場所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

### 3 内容

#### (1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・澤山利広 国際部准教授

発表テーマ「東ブータンの遊牧民族のトランス・ヒューマンズを踏まえた  
開発政策についての考察」

・石川正司 化学生命工学部教授

発表テーマ「将来型高性能蓄電池・キャパシタを可能にする技術  
- エネルギー効率化社会を目指して - 」

#### (2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

文部科学省平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択結果について [資料1](#)

3次元実装技術の開発に伴う記者発表について [資料2](#)

平成23年度学生生活実態調査報告書について [資料3](#)

平成23年度就職・キャリア支援状況について [資料4](#)

社会的信頼システム創生センター 天神橋筋商店街大提灯の設置について [資料5](#)

社会安全研究科博士課程後期課程 開設記念シンポジウムの開催について [資料6](#)

マナーアップキャンペーンの実施について [資料7](#)

総合関関戦の開催について [資料8](#)

関大生の活躍について [資料9](#)

### 4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、本西泰三学長補佐、  
澤山利広国際部准教授、石川正司化学生命工学部教授、  
亀田健二キャリアセンター所長、中川雄弘広報課長 他

### 5 参考資料

(1) 関西大学通信 第414号

(2) 高槻ミューズキャンパス公開講座 チラシ

(3) Kan-Dai SPORTS 4 YEARS RECORD 2008-2011

(4) 大学で何が学べるか(ナニマナ)2013

(5) 行事予定表(6月~7月)

以上

# 東ブータンの遊牧民族の トランス・ヒューマンズを踏まえた開発政策についての考察

国際部准教授 澤山利広

## 【概要】

近年、ブータン王国が提唱する「国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）」に世界の注目が集まっている。GNHは激動する国際情勢を分析し、たゆまぬ自己改革を繰り返しながら発信されてきた開発概念である。GNH政策は、経済的な豊かさのみを追い求めるのではなく、多民族からなるブータン人にアイデンティティーの共有を促すと共に、国民一人ひとりの精神的な豊かさや幸福感の増大を重視している点に特徴がある。経済発展、文化振興、環境保全、よい統治を柱とするユニークな取り組みは、中国とインドに挟まれた人口70万弱の小国の存亡をかけた施策であり、独自の国づくりを世界に印象付ける狙いがある。儂く消えていった近隣のチベットやシッキム王国、ネパール王制と同様の轍を踏まない強かさがうかがえる。しかし、首都ティンプーのある西ブータンで起案されるポリティカル・エコノミーが、ヒマラヤの深山幽谷に息づく多様な暮らしを包摂してしまえば、民族それぞれの習俗の融合によって形作られているブータンならではの文化自体の消滅を招くことは疑いない。

本論では、僻地とされる東ブータンでの営為が、照葉樹林文化にチベットの生活を融合させる遊牧民族の季節移動によって醸成されてきたことを明らかにし、同国の地域開発をはじめとする政策について論考している。

ブータン政府は既存の経済社会指標に加え、様々な面からGNH指標を模索し、政策への反映を試みている。しかし、筆者はGNH政策の価値は、人それぞれに異なる幸福感の定量的追求にあるのではなく、政府と国民が中道を旨とする「もうひとつの開発（Alternative Development）」の実現に向けて協働する姿にあると考える。

世界唯一のチベット仏教国の挙国一致による奮闘は、絶対的貧困に苦しむ途上国だけではなく、先進国で見られる相対的貧困や固有文化の喪失、人間関係の希薄化、さらには経済発展優先に起因する環境破壊等のグローバル・イシューの克服にも示唆を与えるが期待される。

## 【プロフィール】

1965年兵庫県生まれ。（公社）青年海外協力協会理事。社会貢献学会理事。専門は開発経済学、国際ボランティア論、アジア地域研究。下関市立大学卒業、大阪大学大学院修了（国際公共政策博士）。1991年からの2年3ヵ月間を青年海外協力隊隊員として、また1994年から1995年にかけては大阪アジアスカラとしてブータン王国に滞在。天理大学准教授を経て、2009年からは関西大学で国際協力・国際貢献を担当している。国内では被災地でのコミュニティづくり、海外ではアジア、アフリカでの参加型ボランティア活動の企画・立案に携わってきた。猛虎打線のように繋ぐこと（グローカリズム、社会学連携、産官学NPOの協働、理論と実践とのリンケージ）を心がけている。共編著に『国際協力の地平』、共著に『ライフストーリーでつづる国際ボランティアの歩き方』、他。

## 将来型高性能蓄電池・キャパシタを可能にする技術 エネルギー高効率社会を目指して

化学生命工学部 教授 石川 正司

### 【概 要】

東日本大震災および原発問題で、大規模発電による電気エネルギー供給が不安視され、代替として自然エネルギーが有望とされている。しかしながら、風力や太陽光は元来大きく変動する発電電力であるので、「蓄電技術」によって不安定な電力を貯蔵利用することが必須である。また、蓄電技術は普及が進む電気自動車でも不可欠であり、エネルギー回生された電力を受け止めるためにも欠かせない。

このように、電池をはじめとする「蓄電技術」に対する要求が、ますます高まっている。しかもそれは電力系統、交通、職場、家庭などあらゆる場所で求められている。しかしながら現在、蓄電池はその容量、充放電速度、寿命など、いずれも性能においても満足できるものではない。改良のため様々な材料が検討されているが、材料性能以上の開発を強行すれば、電池の発火などの危険性が増すため、困難さが払拭できない。

このような技術限界があるのは、従来の蓄電池開発は、電極材料そのものの性能向上に主眼を置いていたからであり、むしろ電極材料の「表面（界面）」の最適化で技術限界が打破できるのではと考え、このコンセプトで研究に取り組んできた。それに賛同する複数の企業との共同研究も推進してきた。その結果、世界初の、無溶媒リチウムイオン電池（引火の可能性皆無）、世界最高速度で作動するキャパシタ（キャパシタは蓄電装置の一種）など、従来の常識を打ち破る蓄電技術の実現に成功した。

この成果はNEDOやJSTでも注目されて電池技術がプロジェクトテーマ化され、一方、一連のキャパシタ論文は特許庁調査で第一位、米国物理学会から優秀成果として評価された。なお、これら界面制御をコンセプトとした研究成果は、今年度の文部科学大臣表彰の対象成果として去る4月、高く評価されたところである。

この界面制御コンセプトを、関西大学発の重要技術として、我が国の蓄電技術の発展に今後も活かし、さらなるエネルギー高効率社会実現へ貢献してゆく所存である。

### 【石川正司（いしかわ まさし）プロフィール】

1962年西宮市生まれ。関西大学化学生命工学部教授。先端科学技術推進機構長。工学博士（大阪大学）。大阪大学大学院応用化学専攻修了。鐘紡開発研究所研究員、山口大学助教授、ミネソタ州立大学客員助教授などを経て、2003年より関西大学助教授、2005年より現職。リチウムイオン電池ならびにキャパシタの材料技術の提案と開発を専門とする。電気化学会進歩賞・佐野賞受賞。文科省「政府投資が生み出した代表的成果」選定。2010年特許庁調査「キャパシタ論文件数第一位」。2012年 文部科学大臣表彰（研究部門）受賞。